

## 研究の成果と今後の課題

### (1) 子ども育ちの行動指標

昨年、作成した行動指標を使って、観察評価をおこない、人間関係づくり、自尊感情、言語感覚、規範意識の高まりを評価できるようにした。指標は7つの視点で三段階とし、Aは達成、Bはおおむね達成としCは今後の課題とした。

評価は1学期と2学期末とで2回行って比較検討し、個々の児童とクラス全体で、今年度の取り組みの成果や今後の取り組みについて検討した。

#### ・ 指標行動

あいさつ・ありがとう・人間関係づくり

ことばづかい・言語感覚

詩の暗唱、掃除・自尊感情

廊下歩行・規範意識

#### ・ 比較検討

6月 評価人数(人)

評価	あいさつ	ありがとう	チャレンジ100	言葉遣い	詩の暗唱	掃除	廊下歩行
A	38	37	13	22	27	43	8
B	307	316	250	313	306	292	300
C	18	10	9	28	30	28	55

12月 評価人数(人)

評価	あいさつ	ありがとう	チャレンジ100	言葉遣い	詩の暗唱	掃除	廊下歩行
A	74	55	38	32	21	63	20
B	276	303	230	303	318	274	304
C	13	5	8	28	24	26	39

(全体について)

- ・ A(達成)とB(ほぼ達成)をあわせた数は微増であったが、A(達成)の項目の達成数を比較してみると、あいさつ・ありがとう・チャレンジ・廊下歩行が大幅に増加しており顕著なものがあつた。Aとほぼ達成のBを合わせると94%となり、多くの児童が行動面で自尊感情や規範意識等の安定が図られたとみることができる。C(達成できていない)評価においては、多少の減少は見られたが、6月のままの状態が残っている児童もあり今後の個別支援を課題とした。

**子どもの育ちを見る行動指標・指標行動**

人とのつながりを大切にすることも・・・あいさつ、ありがとう  
言語感覚が育った子ども・・・ことばづかい  
自尊感情が高まった子ども・・・詩の暗唱、掃除  
規範意識が育った子ども・・・廊下歩行

見る視点	A	B	C なくしたい姿
あいさつ	相手に合わせた言葉遣いで言える	自分から言える言われて返すことができる	言われても返さない小さくて聞かえない
ありがとう	友だちがうれしくなる行動ができる	自分から言える	催促されないと言えない言えない
チャレンジ100	自分の力にあった課題を設定し、達成できる	達成できる	達成できない
ことばづかい	心が通まるような言葉遣いができる	丁寧な話し方ができる	他人の傷つく言葉を使う命令口調
詩の暗唱	友達を励ましながらか、合格をめざすことができる	自らチャレンジすることや達成感を味わうことができる	興味を持たない再挑戦できない
掃除	周りの状況に流されず、せつせと掃除ができる	自分の担当場所は最後まで掃除できる	やる気がなく遊んでしまふ遅れたり、うろろろして役割が果たせない
廊下歩行	目上の人に会釈ができる	静かに歩く	注意が聞けない走る廊下で遊ぶ、騒ぐ

(A評価、増加の背景および指導について)

- ・落ち着いて生活できる環境・・・要因として、考えられるのが、学級、学校でのルールの定着で、1・3・7・30の法則や廊下歩行（てくてくカレンダー）等の実践、また、聞く態度の熟成や自己評価チェック活動等により、生活が落ちついた。また、言葉遣いの指導を通して、相手を意識できるようになったことも考えられる。
- ・意欲の向上・・・物事への挑戦（大縄の練習・詩の暗唱・チャレンジ100等）で、やり遂げたことの賞賛や成就感が意欲向上に繋がった。
- ・自尊感情の向上・・・特に効果的であった活動としては、発声練習、自己チェック、あいさつカレンダー、各リーダー養成、掃除の手順指導、言葉遣いの指導、チャレンジ100等が有効であった。また、土台には、道徳の研究で、そのねらい、価値と現実生活に関係付けることで、子どもたち主体の学級経営が進められたと考えられる。

(C評価の背景および指導について)

- ・C評価を0に収束させることが課題である。児童は学業や家庭の状況等に課題があり、友だち関係や自信を喪失している傾向が見られた。そのため、言葉遣いに気をつけることで、友だち関係を修復、改善させたり、廊下をよく走る児童を教室移動のリーダーとし見本とさせたりしながら自信回復の指導を継続した。また、消極的な児童を色別のリーダーとして活躍させ、人前へでることで自信をつけさせることや、保護者支援で向上を図った。今後も、C評価のもつ児童に対し、個々への児童理解を進め、良好な人間関係を構築のもと、個別指導や保護者支援を継続して指導していく必要がある。

## (2) 自尊感情アンケート

全校で1学期と3学期とにアンケートを実施し比較検討したが、数値としては、全体的に変化が見られない結果になった。各自で自尊感情を自己評価させる中で、高位にきたのは、\*友だちといると楽しいですかの項目で、みんなと居ることで安心と安定を図っている姿がみられた。しかし、\*友だちに好かれているか、また、どう見られているか。\*うそをついてしまう。\*自分のことをダメだと思う。の三つ項目の評価が低位にきたことと関連して考察すると、友だちから、自分がどう見られ、どう評価されているかを日々気にしながら生活している様子が見られ、他人の行動に迎合しながらの生き方で自信を持ってない子どもの様子が伺えた。特に、低学年では、\*みんなの前で失敗すること。の項目で顕著に評価が低く、自己否定（自分はダメだ）や恥意識が全体に強く、広く存在することが考えられ自分をそのまま出し切れていない姿がみられる。よく嘘をついてしまうところの項目では、友だちからの評価をよくするために、自分を守ろうとする自己防衛の姿が見られ、そこに恥意識が大きくも影響して嘘に繋がっていると考えられた。

結果を踏まえ、今後、子どもたちが自己評価（自分の行動、生き方を問う機会）をもち、教師がその自己評価を認め、修正、方向づけるなかで、自尊感情を高める指導や教育システムを作り、全体、個々へと対応していくことが急務になってくる。